

映像教材「砂漠のおもてなし」を利用した国際理解教育実践の事例

ここに紹介する学習活動は、東京都港区立三光小学校の課外活動「地球探検クラブ」の児童10名（4～6年生）を対象にして実施された。地球探検クラブは、同校の宇土泰寛先生の指導の下、毎月一回集まって一年間地球上の様々な国や地域について「探検」するように体験学習をする。2005年度の学習テーマはオーストラリア。その中の2回を先住民のアボリジニに関する学習に割り当てた。アボリジニ学習の部分は、桜美林大学「草の根国際理解教育支援プロジェクト（代表：高橋順一）」との協働で実施された。宇土先生と高橋が協力して基本的な構想を描き、高橋が学生とともに指導案を作り、学生がファシリテーターとなって実際の教育活動を実行した。

国際理解教育や開発教育において、今日の日本とは人種や文化の面で、また生活水準の面でも大きく異なる人々を理解するためには大きな困難がつきまとう。それは、学習者自身との違いの大きさのために、言語のみではリアルな姿を伝えることができず、また反対に、リアルな映像資料を不用意に提示すると学習者に大きなショックを与えて拒否反応を誘発しやすいということである。そこで今回の実践では、時間をかけた体験学習をいう方法を用いた。2回の活動のうち1回目では、アボリジニの姿は見せずに、彼らのアート（音楽と絵）に触れるという活動をして、感覚器官を通じて子供たちがアボリジニ文化に馴染ませることを試みた。そして一月後、子供たちの中にある程度のレディネスができあがった所で、第2回目の活動を行い、そこで初めてアボリジニの姿を視覚的に提示した。そこで重要な役割を果たしたのが、黒須章子氏の作品『砂漠のおもてなし』である。活動では、8枚の写真（カラーコピーでA4サイズに拡大しラミネートして、紙芝居のような形にしたもの）を利用し、黒須氏の体験を子供たちが追って疑似体験するような手法で学習を進めた。同時に、楽器と食べ物を組み合わせて、学習に能動的な体験の要素を付け加えた。

以下に紹介するのが、その進行台本である。我々の判断では、黒須作品は非常に強力な教材となり、豊かなコンテンツとストーリー性とともに、子供たちの心を強く惹きつける力を持っている。利用法に多少の工夫が必要ではあるが、このすばらしい素材を先住民（オーストラリアのアボリジニ）学習のために、多くの教師が有効に利用して欲しいと思う。

（桜美林大学国際学部教授 高橋順一）